

・作るⅡ

5月7日(火)～18日(土)

担当=山崎, 鈴木, 望月, 渡辺, 福島

テーマ; 自動車を解体し, 別な新しい造形物として, 再度構築する.

5月7日(火) (L1) PM 1:00～3:00

- ・テーマ説明 及び, 自動車解体に无いでの注意事項の説明を講習. (自動車整備士に依頼)

8日(水)

- ・前半... 解体作業
(解体については, 危険をともなうので, 主として, 彫刻棟前の広場を使用すること)
- ・後半... 構築作業

17日(金) /チーム毎に出来上り作品の批評 及び 意見交換.

18日(土) 後片付け, 掃除.

※ 8日～17日の作業期間中に今回のテーマにそった講義を行なう.
渡辺元生 (L1)

※ 提出作品について

- ・各チーム毎に, 1, 2点の共同制作による作品
- ・各自, テーマをイメージで捉えたデザイン, 構想図等の表現による作品. (7シート紙, 一点)

(構想図は, 自動車解体作業中に仕上げ一度提出する.
構想図をもとにして, チーム毎に考えをまとめ共同制作をする.)

◎ 使用材料 及び 道具等

(各チーム (15～6名) 毎)

車 一台, 工具一式, 鉄舟 2ヶ, フロック 4ヶ
軍手 各自一組, シート 1枚
(その他, 研究室にある道具は, その時々貸し出します)

①

- ・溶接などの作業が, 必要な場合は教員に申し出ること.
- ・作業時は, 長袖, 長ズボン, 運動靴の作業着とする.
- ・ボロ布(綿)は各自できただけ多く持参.

半世紀の歴史を持つ美術学部総合基礎実技のアーカイブ化の作業は、今年で6年目となる。毎年50万円の予算の枠内で、非常勤講師2名が授業のない後期に都合に応じて臨機応変に取り組む体制は同じである。今年度は井上舞、前田耕平の2名が12月2日～17日の土日を除く計12日間にスキャニングを中心とした作業を行い、昭和60（1985）年度から昭和62（1987）年度分の資料のデジタル化を行なった。

対象となるのはこの時期の手書き・青焼きの文書（「カリキュラム冊子」と称している）と、紙焼き写真やネガフィルム、スライドによる作品記録だが、80年代後半にはビデオテープによる動画記録も現われ、今後記録メディアの変化に対応したデジタル化の手段が課題となる。スキャニングは長時間を要するので、機材面の充実なども今後必要になる。それ以上に作業上の困難となっているのは、年度によって記録の対象や手段が異なること、さらに重要な基本記録の欠落である。当時は記録とその整理にさほど意識的でなく、一貫性がないのは仕方ないとしても、昭和56（1981）年、昭和58（1983）年は学生名簿すら見当たらない。かつて小清水漸先生（彫刻家、現名誉教授）が在任中、「70年代後半、アメリカから来た日本の美術大学視察団が総合基礎に関心を示して資料を求めたところ、未整理のため見せることができなかった」と言われていたことを思い出す。

さて80年代中期の課題内容だが、この時期はおおまかに「描く」「作る」「共同制作」に大別され、前二者はそれぞれ3～4の小課題に分かれる。そしてそれぞれについて各担当教員が具体的内容を決めるかたちだ。70年代は「共通ガイドダンス」と呼ばれたように、各ジャンルの基礎技術的な課題が多かったが、80年代以降は思考や発想方法が問われるものが増えてくる。注目すべきは、まだ空きの多いキャンパス空間の特質を活かした大掛かりな課題である。例えば1985（昭和60）年の「作る II」（5月7日～18日）は「自動車を解体し、別な新しい造形物として再構築する」というものだ。新入生全員が7～8名ずつ16のグループに分かれ、驚くべきことに各グループ毎に解体対象となる自動車1台が支給される。成果もただ分解してアッサンブラージュしたものだけでなく、キャンパスの広がり背景にして、真っ二つに裁断する、立てる、埋めるといったダイナミックな展開が見られる。現代の究極の機能物といえる自動車とその部品の日常的な見方をくつがえして造形物に変換する興味深い内容である。

アーカイブ作業を通して、キャンパス環境をモチーフ豊かで多様な表現を許容する芸術教育のインフラとして維持することの重要性をあらためて痛感する。80年代はまだ池が今のように柵で囲われておらず、人と池の水面がもっと近い関係にあった。1987（昭和62）年の第1課題「描く」では、学生たちが岸辺に座って水面を写生しているさまが見られる。その広い水面の描写から水のイメージを自由に展開するのである。池は人工ではなく湧き水による自然池であり、この土地の原地形の名残である。京都芸大が自らの教育理念を「アクア @KCUA=AQUA（水）としての芸術」と見なすようになるのは、この20年後のことである。移転を控え、今さらながらこの沓掛の地の豊かさに気づく。

井上明彦（美術学部教授）